無停止型のPCサーバー

ウィンテル採用、400万円から

日本ストラタス

日本ストラタスコンピュータ（東京・千代田）は低価格の無停止型コンピューターを開発、今年秋から日本で拡販する。OS（基本ソフト）として米マイクロソフトの企業向け「ウインドウズ2000」を採用しただけでなく、同社が自社設定したデータ処理を効率的に実施し故障を防ぐための半導体チップなどを搭載している。二〇〇一年末までに約五十社と販売代理店契約を結び、二〇〇三年度に国内で約三百億円の売り上げを目指す。

日本ストラタスは八六年に米ストラタス社の子会社として発足、これまではUNIX・OS（基本ソフト）をベースにした無停止型コンピューターを拡販してきた。今回発売するのは「ftサーバー」シリーズの二機種で、最小システム構成価格で約四百万円程度に設定、十月から出荷する。ftサーバーシリーズは米インテルのMPU（超小型演算処理装置）を使うが、自社設計の半導体やソフトでデータ処理を複数のMPUに分散、システムの故障を防ぐことにノウハウを持っている。

販売代理店は現在、従来のUNIX・OSベースの製品について国内で二十社と契約しているが、現在はPCサーバーに強い販売会社と交渉しており、合計で五十社程度を組織化する。

日本ストラタスの飯田晴祥社長は「インターネットビジネスでは二十四時間、三百六十五日の稼働が保証されるサーバーが求められる。従来の十分の一程度の価格で実現しており、今後三年間に国内で七千台の販売を狙う」としている。

携帯情報端末

香港ハチソンに供給

カシオ モバイルネット用に

カシオ計算機は二十六日、香港のハチソンテレコムに携帯情報端末を供給すると発表した。八月下旬より出荷を開始する。独シーメンスのインターネット対応携帯電話と接続し、インターネットの動画像などを閲覧できるようにする。カシオとハチソンの共同ブランドで、ハチソンが傘下の販売店を通じて販売する。価格は四千香港ドルになる見込み。

カシオが供給する「カシオペアEM-500」

供給するのはマイクロソフトの新OS搭載端末「ポケットPC」に対応した「カシオペアEM-500」。同端末とシーメンスのネット携帯電話「35シリーズ」を組み合わせ、ハチソンの携帯電話向けインターネットサービス「オレンジワールド」を利用する。

同端末でインターネットのカラー画像を見たり、音楽を再生することができる。携帯電話の画面では表示できない動画なども楽しめるという。将来は通信機能一体型の端末も投入する計画。

カシオは現在、香港で携帯情報端末「カシオペア」を販売しているが、ハチソンと協力してインターネットを利用したサービスを強調することで新たな需要を開拓する狙いがある。英ボーダフォン・エアタッチ向けに次世代携帯端末を供給するのを始め、今後も各国の携帯電話会社などとの協力を進め、携帯端末事業の拡大につなげる考えだ。

台湾エイサー

携帯電話を自社発売

ブランド知名度向上図る

【台北＝北原基彦】台湾最大のパソコンメーカー、宏碁集団（エイサー）の周辺機器メーカー、明碁電通（エイサーCM）は二十六日、台湾で「エイサー」ブランドの携帯電話端末を発売したと発表した。これまで同社はOEM（相手先ブランドでの生産）を主体に携帯電話端末の製造を手掛けてきたが、自社ブランド製品の本格投入には、内外の携帯電話市場での知名度向上を図る狙いもあるとみられる。

携帯端末はアジアで普及しているGSM方式で、中国語の入力や表示に対応。重量は八十八グラムと軽く、性能は台湾で大きなシェアを占めるノキアやエリクソン製の端末と比べてそん色はないという。実売価格は七千台湾ドル（一台湾ドル＝約三・四円）前後。

明碁は九八年から携帯電話端末の製造を本格化、これまでにOEMを中心に二百五十万台を出荷している。同社は自社ブランド製品の発売と相前後して二十億台湾ドルを投じて生産ライン改良、生産能力を月産八十万台程度に拡大した。秋までに生産能力を同百万台に引き上げる。

明碁電通はグループ内でモニターやCD-ROMドライブなどパソコンの周辺機器の生産を受け持ってきた企業。携帯電話端末はTFT型LCD（薄膜トランジスタ型液晶表示装置）などとともに同社の今後の基幹製品として位置付けられている。

エイサーCMが台湾で発売する携帯電話

半導体オーディオプレーヤー

4時間の音声メモ機能も

ニチメン、9月下旬に発売

ニチメンは九月下旬からボイスメモ機能などを備えた小型の半導体オーディオプレーヤー「V@mp（ヴァンプ）」＝写真＝を販売する。音声データの圧縮方式「MP3」を使った音楽の記録・再生のほか、内蔵マイクで会議などを最大で四時間録音できる。パソコンの外部記憶装置として、表計算や画像などのファイルを記録することも可能。価格は三万四千円で、国内で量販店などを通じて販売するほか、米国や欧州にも投入して年間三万台の販売を目指す。

V@mpは重量が四十五グラムと軽量。単四乾電池一本で約七時間駆動する。OS（基本ソフト）にウインドウズかマックOSを搭載したパソコンから、音楽ファイルを転送して使用する。六十四メガバイトのフラッシュメモリを内蔵しており、CD並みの音質で六十四分、FMラジオ並みの音質なら百二十八分の音楽を記録できる。

ニチメンと時計・アクセサリーなどの企画を手掛ける香港系企業のエヌエイチ・ジャパン・ホールディングス（東京・台東）が共同で企画して、韓国メーカーに生産を委託した。

家庭の電線を情報化

エコーネットコンソーシアム 標準規格を策定

三菱電機、東京電力など七十五社でつくるエコーネットコンソーシアムは二十六日、電力配線を家庭用情報ネットワークに応用する際の標準規格「バージョン一・〇」を策定したと発表した。参加各社の製品の互換性確保に利用するほか、インターネットのホームページを通じて無償で公開し、新たな企業の参画を促す。

エコーネットは、電力供給用に住宅に埋め込まれている電線を、情報ネットワークの配線として用いる。住宅内に新たに配線工事をする必要がないため、通常の家庭でも介護支援や防犯などのシステムを手軽に構築することができる。

三菱電機などが九七年十二月にコンソーシアムを設立し、接続手順や接続装置の仕様などの標準化を進めてきた。三菱電機、東京電力に加え、シャープ、東芝、日立製作所、松下電器産業の計六社が中心となって運営している。

コンソーシアムでは今後、家電製品から対象機器の範囲を広げると同時に、セキュリティー機能などの規格化も進める。また規格に関するライセンスの取り扱いや、各社の製品が規格に適合しているかどうかの検証方法の検討、認証機関の設置などを検討する。

CPU集約で高速化

デジタル複写機4種

キヤノン、9月発売

キヤノンは様々な機能を制御するCPU（中央演算処理装置）を業界で初めて一つに集約、データ処理を高速化したデジタル複写機「MEDIO iR」シリーズ四機種を九月一日から順次発売する。原稿の記憶容量は同社従来機に比べ二倍強に拡充し、コピーの予約件数を増やすなど使い勝手を高めた。価格は「5000」で二百八万円。

これまで各機能ごとに設けていたCPUを一つに集約することでデータ処理速度を高めた。コピー、プリントなど複数の機能で効率良く文書を入出力できるようにした。

内蔵するハードディスクの容量は五・一ギガで、約四千ページの原稿を記憶できる。

メモリーカード

年内に市場参入

TDK、米サンと契約

TDKは二十六日、デジタルカメラなどの記録媒体であるメモリーカード市場に参入すると発表した。米サンディスク社とクロスライセンス契約を結び、年内にも自社ブランドで「コンパクトフラッシュ」を発売する。TDKは二〇〇五年にメモリーカード事業で年間三百億円の売上高を目指す。

TDKはメモリーカード用のコントローラーICを開発、事業化を探っていた。このコントローラーの特許と、サンディスクが保有するカード製品の設計・生産に関する特許に関してクロスライセンス契約を結んだ。TDKブランドのメモリーカードを発売するほか、コントローラーICの外販も計画している。

〈生産は海外の協力メーカーに委託する方針。まずコンパクトフラッシュカードのほか、「スマートメディア」をパソコンに挿入するためのアダプターを商品化する。

eビジネス デジタル機器

ハードウオッチング

▷テクノロジー◁

シャープの超高開口率液晶

高精細と明るさを両立

シャープは八月、大型の液晶工場を三重県多気町で稼働させる。生産の中心は新開発の高付加価値のTFT（薄膜トランジスタ）液晶表示装置「ワンダーピクス」シリーズだ。BSデジタル放送の開始やデジタルカメラの性能向上をにらみ、質感を忠実に再現できる表示装置が求められていることから、高輝度・高精細を武器にした商品戦略を推し進める。

TFT液晶表示装置の画面は小さな色の点（画素）で構成する。表現力を高めるには画素を小さくして密集させればよいが、そうすると画面が暗くなる。各画素は電極線で仕切られ、それぞれトランジスタを内蔵している。画素を増やせば電極線やトランジスタの領域も広がるが、これらは光を通さない。そのため高精細になると全体的に光を通しにくくなり、輝度が低下してしまう。

バックライトを強力にすれば解決できるが、消費電力が増大するためモバイル機器には向かない。東芝などは液晶を従来のアモルファスから低温ポリシリコンに切り替える手法を採用している。ポリシリコンは液晶ガラスに半導体の性能を盛り込むため、回路領域を狭めて光を通しやすくすることができる。ただ、ポリシリコンは大型パネルの製造が非常に難しいといわれ、値段も従来型より高くなる。

シャープが開発に取り組んだのはアモルファス液晶の表示装置。低消費電力で明るさを維持しながら高精細を実現した上に画素を作る方式に切り替え、画素領域そのものを大きくした。

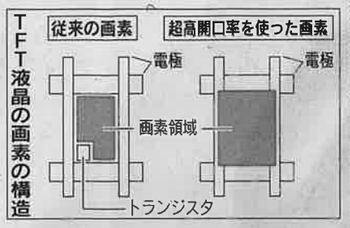
この結果、百ppi（一インチ当たりの画素数）以上の画素密度を実現。しわや凹凸、光沢などをグラビア並みの画質で表現できるようになったという。ノートパソコンやテレビ、医療用器具の表示装置として販売する計画で、まず十三・三型から二十型のサイズをそろえる。

現行のパソコン用液晶モニターは表示規格でXGA（約七十八万六千画素）タイプが主流。韓国や台湾メーカーが十三―十五型で攻勢をかけ価格が下落している。

シャープはSXGA（百四十七万画素）やUXGA（百九十二万画素）タイプのワンダーピクスに主軸を移し、価格競争を避ける方針。高付加価値化がどれだけ収益安定に寄与するか、今後注目を集めそうだ。

（石塚史人）

超高開口率技術で開発したシャープの液晶表示装置「ワンダーピクス」



TFT液晶の画素の構造